

大学図書館問題研究会 京都

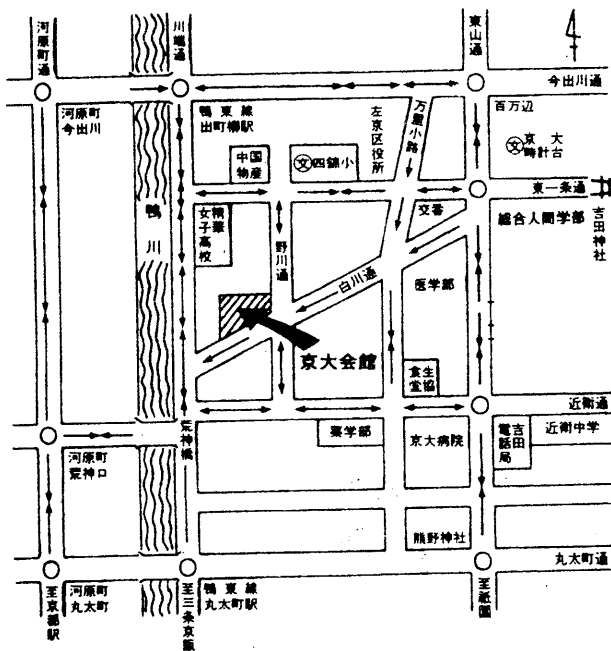
〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橋女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

大学図書館問題研究会

第19回 京都支部総会

日時 7月2日(火) 午後6時30分~

場所 京大会館 103号室



(京大会館)

- JR京都駅より市バスA2のりば(206)東一条下車
- 四条京阪(龍崎側)より市バス(201)(31)東一条下車
- 三条京阪前口より京都バス5番乗場(出町柳経由系統)荒神橋下車
- 京阪鴨東線丸太町駅下車徒歩約10分

次頁以下 **総括& 大会議案書 方針**

〒606 京都市左京区吉田河原町15-9 075-751-8311 京大代表753-7531 内線7612 FAX761-5403

大学図書館問題研究会

第19回京都支部総会議案

【第1号議案】 1995年度活動総括（案）及び 1996年度活動方針（案）

はじめに

大学図書館をめぐる情勢は、近年インターネットの出現とその広まりに代表されるように急激な情報環境に対してどのように対応するのか模索中であるというのが現状であり、

図書館が情報の拠点としてのその地位を確立するかいなかの岐路に立たされているといっても過言ではないでしょう。

このような状況のもとでは情報環境の変化にばかり目を奪われがちですが、大学図書館問題研究会の活動の柱である「求める人に求める資料を」というテーマを考えた時、「図書館員の求められる力量は何なのか？」あるいは「図書館員の専門性とは一体何なのか？」と問われれば、まず「資料に強い」ということだと答えるべきだと思います。抽象的な言葉ですが、これには主題知識や目録知識の豊富さ、参考ツールに対する知識の豊富さなどがあげられます。これらの知識はいくら情報環境が変化しようとも、利用者サービスの向上のためには必要不可欠なものであり、これらの知識の上に新しい情報媒体を使いこなし、自ら利用者に対し情報発信しうる力量を身につけることが図書館員の真の「情報リテラシー」なのではないでしょうか？

大学図書館問題研究会京都支部ではこのようなこと踏まえ、活動を展開して来ました。以下に1995年度活動総括（案）と、大学図書館問題研究会京都支部の活動をより発展させるための1996年度活動方針（案）を提案して行きたいと思います。

1. 1995年度活動総括（案）

(1) 研究活動のさらなる発展とネットワークづくりの重視

1995年度においては、研究活動をさらに発展させ、それを契機として研究会の組織化などの新たなネットワークづくりを模索しようというものでした。

研究活動については、研究集会や支部報を通じて一定の成果をあげることができたと思いますが、これらを契機とした新たなネットワークづくりを展開するところまでは、到達することは出来ませんでした。その原因としては、①核となる人を組織することができなかった、②仕事がますます繁忙になっている、③テーマの設定や材料を常に用意することの困難さ、④職場を越えた場合の地理的な問題、などがあげられます。1996年度についてもこのような問題点を踏まえながら継続課題にしたいと思います。

(2) 第4回大学図書館員京都研究集会

今年度は、10月15日(日)に立命館大学びわこ・くさつキャンパスにおいて、第4回大学図書館員京都研究集会を実施しました。テーマは「インターネット入門」と題し、講師には津田圭司氏(立命館大学教育研究システム課)を招き、実際にワークステーションに触れて実習する形式をとりました。

参加者は40名で大変好評でした。ただ、内容のボリュームがかなり大きかったため、最後の部分(ホームページを作るの部分)が時間の関係で詳細にできなかったのが残念だったという意見が聞かれました。参加者からは是非、次回は「ホームページを作る」というテーマで開催して欲しいという要望も出ていました。

(3) 支部報

支部報の発行については、毎月の発行を行うことができました。

この支部報は、会員間のコミュニケーションの場、会員の研究発表の場の提供、支部活動の報告など極めて重要な役割を担っています。

今年度は、さまざまな会員に執筆する機会を持って頂くという試みで、「大図研京都数珠つなぎ」というコーナーを作りました。このコーナーを通じて、新たな会員間のコミュニケーションが生まれればと思います。

他の記事の内容については、支部総会や研究集会、5支部新春合同例会、全国大会などの感想記事、書評や書誌学に関する研究発表、インターネットのホームページ(HTML)作成のための入門的な記事、長年、大図研で役職を勤めてこられた竹本氏(元、同志社大学)の回想記事などを掲載しました。

(4) 近畿5支部合同新春例会

合同新春例会については、今までとはスタイルを変えて、「大学図書館の現状と未来」というテーマを設定してパネルディスカッションの形式を取りました。

“大学図書館の未来像とは何なのか?”はつきりとした形では問題提起することはできませんでしたが、大学図書館が電子図書館やインターネットをどう捉えるのかを考える一つの契機となったのではないかと思います。

(5) 財政活動

財政活動については、支部の活動の根源をなすものであります。今年度は、積極的な会費納入の働きかけを行い、会費未納会員を一定整理することによって会費納入率を上げることができました。また、研究集会などが成功したこともあって、ほぼ健全な財政活動を行うことができたのではないかと考えられます。

2. 1996年度活動方針（案）

(1) 研究活動のさらなる発展とネットワークづくりの重視

今年度は研究活動をさらに発展させ、研究会の組織化を含めた会員間のコミュニケーションの場の提供をとりわけ活動の重点にしたいと思っております。もちろん研究活動を中心にした場の提供になるかとは思いますが、近年会員間の交流も少なくなりつつありますので、様々な形で提供できればと思っております。

具体的には支部報で提案したいと思っておりますが、“ライブラリアンシップ”などに関する外国雑誌の学習会を行うことなども検討しております。

(2) 研究集会について

今年度は、次に述べる大図研大学との関わりもありますが、秋と春に2回実施したいと思っております。

内容については、まだ検討していませんが、1回は実習を含めたインターネットを題材としたもの、もう1回は専門性を高めるようなテーマを設定したいと思っております。

(3) 大図研大学について

大図研大学については、連続講義で行うテーマを設定することの困難さや毎週の休日を返上して受講するという受講条件の困難さなどの問題があり、その実施方式も含めて検討してみたいと思っております。

(4) 支部報について

今年度も毎月の発行を目指します。

また、できるだけ多くの人に執筆していただけるよう、紙面づくりも含めて、よりよいものにして行きたいと思っております。積極的な会員の皆さんの投稿をお待ちしております。

(5) 会員を増やす活動

大学図書館問題研究会および京都支部の活動を説明し、会員を増やす活動を進めたいと思います。

もちろん会員を増やすためには、活動を内実のあるニーズにあったものとする必要があります。また、組織の活性化のためにも京都支部の若返りの必要性が指摘されており、活動内容とリンクさせて論議して行きたいと思います。

(6) 会費を全員が全額を前納します

京都支部の会費の納入率は、全国的にもかなりの影響力をもっており、京都支部の活動自体にも大きな影響を及ぼします。したがって、会員としての義務である会費納入を全員が確実に行いましょう。

(以下の議案は当日配布)

- 【第2号議案】 1995年度決算報告
 1996年度予算及び会計監査報告

- 【第3号議案】 1996年度支部役員選挙

目次	第19回京都支部総会議案書号 (No.136) 第19回京都支部総会議案…………… 2頁 大図研京都数珠つなぎ (第5回) …… 6頁
支部報に関するご意見は最寄の支部委員または編集気付 (京都橘女子大学図書館 ☎075-574-4118 <FAX・4124> NIFTY-Serve: PXX01651 小林) まで	

衝撃の新コーナー!!

大図研京都数珠つなぎ 第5回

京都大学
経済学部図書室

さわいとしまつ
沢居紀充 さん

火の番人

みんな寝静まった
眠れ 眠れ

ぼくがストーブの番人だ
目覚めのときまで

山小屋の夜はまずワインで過ごす
イタリア チリ ドイツ三国の物産がある

腹が減ったら焼きいも
熱いやつを熊のように賞味する

渴きを癒すのは雪で冷やしたオレンジジュース
またトロピカルジュース

眠気が襲ってくれば
雪を踏んで別棟のトイレに通えばよい

明け方 昨夜のプチェーロを暖め
餅を二つ入れて

さて 北山雑煮を食べるころ
ようやくオザワさんが起きてくる

卵

山小屋の外は雪
屋根にもどっさり

山小屋の中では
ファティマとイムティアズのつくる
金色のカレーがストーブの上で煮えている

ああ 山小屋はまるで
大きな鳥の卵みたいだ

それでぼくらは
卵白のように溶け合う

われわれの「吉田日本語学習友の会」で、この1月、京都北山の山小屋に行った。9人の留学生・研究者と4人の日本人スタッフが参加した。留学生たちの出身国・地域は、台湾、中国、バングラデシュ、インド、アメリカ、ブラジル、アルゼンチンの7つ。雪の深い谷間の山小屋で一泊し、大いに語り合った。

4回の食事楽しいもので、行きも帰りも、昼は、雪の上にリンゴやみかん、サラダ用のキュウリやレタスをならべ、熱いミルクココアを湧かして食べた。

夜は、ストーブに火をがらが燃やし、その上に大鍋を置いて、アルゼンチンのプチェーロを煮込んだ。材料はじゃがいも、さつまいも、かぼちゃ、にんじん、キャベツ、ほうれそう、とうもろこし、セロリ、青ねぎに肉である。またバングラデシュの野菜カレーも金色に仕上がった。

朝は、タベのプチェーロの残りを活用して、雑煮とおじや。またアメリカ風オムレツ。

この山小屋生活は、3年前の夏に続き2度目だが、みんな本当にここから溶け合った。2月3日の夜には、写真注文会と称してまた集まり、吉田神社の節分の人込みを歩き、人込みを出て、吉田山の頂上の雪の上で、月を仰いで語り合った。

これらの得がたい感動を永遠に記録するために、ぼくは参加者一人一人を主人公にした詩をつくり、雪の山小屋の同胞たちに配った。ここにあげたのは、そのうちの2編である。

次回は、京大文学部図書室の平川和子さん。